オスプレイは撤去できる

前衆議院議員　瑞慶覧長敏

私は、確信している。オスプレイは、必ず、沖縄の地を離れる。沖縄から追い出すことができる。

9 月 9 日。我々は、確認したはずだ。「この日が闘いのスタートだ」と。そして、その日以来、途切れることなく運動が続けられている。

「これまでとは違うんだ」という強い思いが、誰の胸にも自然に生まれ、共通認識となっている。決して強制されたものでもないし、誰かが号令をかけたものでもない。自発的な運動だ。

「今度の今度こそは、何が何でも絶対にダメだ」「自分が今、頑張らなければ、郷土・沖縄が大変なことになる」「子孫の為、体を張るんだ」「子どもたちを不幸にしてはいけない」――まさに、ひとりひとりが立ち上がったのである。

これこそ、大衆運動の原点であろう。

本物の大衆運動が、沖縄で、今、産声を上げた。そして自らの足で立ち上がろうとしている。本物である限り、簡単に消えることはない。どのような圧力がかかろうが、どのような困難が待ち受けていようが、我々は、負けることはない。必ず、勝利する。

民主党政権の過ちは、沖縄における大衆運動が持つエネルギーと真の意味に最後まで気付けなかったことにある。県民を、馬鹿にしてはいけない。

400 年間にわたり主権を蹂躙されながらもしたたかに生き抜いてきた我々琉球人には、しなやかで強靭な意地がある。この想いだけは、最後まで貫き通す。

400 年は長い。しかし、耐え抜いた。では、これからの 400 年をどう作っていくのか。今回の運動は、未来を賭けた闘いでもある。自らの生き様は自分たちの手で決めていくんだという覚悟を、己に課した厳しい闘いなのだ。

そして、我々は、沖縄の可能性に気付いてしまった。もう、基地がなくても、いや、むしろない方が、より良い未来を、経済を、築いていけるんだと。「日米地位協定」などという不平等、不条理がまかり通るが故に、常に苦しめられるんだと。

日本政府が、沖縄の声に聞く耳を持たないのであれば（私は現在まで、聞くふりをしているだけだと思っている）、我々は、世界に広く訴えよう。不条理を、不平等を、遍く人々に訴えよう。人権という普遍的テーマを堂々と掲げて、我々の主張を繰り広げていこうではないか。

原稿を執筆している最中に、衆議院の解散が決まった。自国の民を顧みることなき政権は、どこであろうと誰であろうと沖縄は受け入れない。闘いの勝利に向け、頑張ろう！

2012 年 10 月 25 日、於・社団法人日本外国特派員協会
オスプレイ問題や在日米軍の犯罪について、外国メディアに向けて発信。中東、オーストラリアなど各国で報道。

外国メディアを通して、またインターネットを通して、直接、発信をしています。今後も、引き続き取り組んでまいります。